
バカとテストと隻腕の観察処分者《改》

広地 永久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと隻腕の観察処分者《改》

【Nコード】

N1266Y

【作者名】

広地 永久

【あらすじ】

Aクラス戦終了後。雄二たちと帰っていた明久は、鉄パイプの下敷きになってしまいそんな男の子を助けて、代わりに下敷きになってしまう。

一命は取り留めたが、代償として右腕を失ってしまった。

隻腕の観察処分者となった明久が、ハンデを気にせずに明久らしく頑張る！！

ストーリー自体はあまり変えずに（無論多少変わっているところも

あります）、加筆、修正をしてあの駄作者広地が隻腕（ryと共に帰ってきた！！

……なんてそんなのは置いといて……少しはよくなった（？）ので、みていただけると嬉しいです！！

三十問あたりまで、週2～3回更新予定。

プロローグ（前書き）

がんばって帰ってきました。
見てくださっている方、本当に感謝感謝です！！

ブローグ

帰り道……

「明日から机がみかん箱に……ふう」

Aクラスに負けた僕らは、ただでさえボロボロの壊れたちゃぶ台と腐った畳という設備から、みかん箱と莫座もざというとんでもない設備になってしまった。

「雄二、あれだけ勝てるって確信していたのに……なんだよ3点で、小学生の問題でしょ？ さては勉強とか全くしてなかったね？」

「……すまん、その通りだ。小学生の問題だと完璧に見くびっていた。でもお前だって佐藤に瞬殺されてただろ？」

「うぐっ……」

確かに、僕にも責任はある。

実際に、物理で瞬殺されちゃったし……。

フィードバックで辛いわ、みんなに責められるわで大変だった。

「まあまあ。今回はきつとツイてなかったただけなのじゃ。それに、ワシにも責任はあるしの」

「ひ、秀吉？ 秀吉は仕方ないよ、だってほら、お姉さんが……」

本当に仕方ない事だと思う。秀吉はお姉さん（優子さんだっけ？）の手によって危うく殺されるところだったんだから。

「木下の言う通りよ。また頑張ればいいじゃない？ 瑞希もそう思うわよね？」

「そうですよ。また頑張ればいいんですよ」

「美波……姫路さん……そうだね、また頑張れば……！！」

もっと頑張つて、次こそは打倒Aクラスだ！

「……………次は三カ月後」

あー………そういえばそうだったけ？ 戦争に負けたから当たり前か。だけど、三ヶ月も宣戦布告が出来ないのはちよつとキツイなあ……。

「じゃあさじゃあさ、もっと勉強して——」

そこまで言いかけて、僕は大変なことに気づいてしまった。

数メートル先で男の子が転び、

突風で、クレーンで束ねられていた鉄パイプが下に落ちる。

その真下には……

「危ないっ！！！」

全速力で走り、左手で男の子を突き飛ばす。
そして、僕もよけ――

ようとした所で、タイムアップ。僕の上に鉄パイプが落ちてきた。
そして、そのほとんどは右腕に。

「「「！！！？ 明久っ！！」」」

「アキッ！！」

「明久君！？」

駆け寄ってくる皆。

顔をさっきの男の子の方に向けてみる。
ちよっと驚いているようだけど、どうやら男の子は無事のようだ。

「……………よかった……………」

そこで僕の意識は闇に落ちる。

.....。

少しまぶしくて、意識が戻る。

目の前に広がる光景は、

救急車。

僕に呼びかける医者。呼びかけてきているのは分かってるんだけど、なんて言ってるんだろう？

焦っているムツツリー二と雄二。焦る雄二なんて面白い物を見たなあ。

泣きじゃくっている姫路さんと美波。

秀吉は、無表情。でも、いつもの自然な感じと違って、演技だつて言っのがばればれだよ？

そして、あの男の子は、いなかった。

また、意識がゆっくりと闇に落ちていく。

ブローグ（後書き）

ご意見、ご感想など、心よりお待ちしております。

第一問 僕と事実と仲間達（前書き）

変える事が出来てるんでしょうかね……？

セリフとかは結構変えているんですけど……。

第一問 僕と事実と仲間達

「う……うつ……」

全身を包む鈍い痛みに目を覚ますと、ぼんやりとはしているけど
皆の顔が視界に入ってきて来た。

「お、明久、起きたか」

「……………明久……っ……！」

「あ、明久……ワシは……！」

「アキ……！」

「明久君！」

「アキ君……！ 無事に目を覚ましてくれて何よりです……………」

一体、何があっただっけ…………？

……………そっか。僕は落ちてきた鉄パイプの下敷きになったんだ。

そんなことがあったのに……………よく生きてたな僕。

今回ばかりは普段から体が鍛えられていたという事に感謝しざる
を得ないな。

「皆……………心配してくれたんだ。ありがとう」

そう言って起き上がろうとして、初めて気がついた。

自分の右腕がなくなっている事に。

「あれ……？　なんで……？」

服の右袖を触ってみるけど、あるのは布の感触だけ。

右肩から伸びているはずの腕が、ない。

袖をまくって肩を見ると、嚴重にきつく包帯が巻いてあった。他の所も触ってみると、頭とか色々なところに包帯が巻いてある。触っていると、痛みが強くなった。

……さっきから鈍い痛みが続いていたのはこれが原因だったのか。

「……明久。落ち着いて、よく聞くんだ」

僕には落ち着けなんていつてるけど、目が泳いでいたりせわしなく手を動かしていたりと、雄二の方が落ち着いていない。人に言う前に自分で気をつけるべきじゃないだろうか。

当の雄二は、少しためらってる様子で考え込んでから、何かを決心したように口を開いた。そしていつもよりもっと低い、重い声で

「鉄パイプは、ほとんどが右腕にふりかかった。運良く（・・・）な。おかげで、他のところにはあまり当たらずにすんで、軽傷だった……右腕よりはな。だが代わりにほとんどの鉄パイプを受けた右腕の損傷が激しかったらしい……。切らざるをえなかったんだ」

そう言い放った。

「「「……………」」」

雄二がそう言ったきり、皆は黙ってしまった。なんだか気まずい空気が周りを流れる。

僕はそれで右腕を失う破目に……。でも、そんな事より、

「そんな事よりさ、あの時の男の子は何も怪我とかなかったの？」

僕のことより、あの男の子の方が心配だ。

「そんな事よりって……まあ明久君らしいといえば明久君らしいです
すね」

「そうよね。自分の体より人の事のほうが大事だもんね、アキは」

「……………明久らしい」

「それが明久の良い所なのじゃがな」

良い所なんてそんな面と向かって言われると照れるな……。

「それで、一緒にいた男の子の事ですが、転んで膝を擦りむいた以外に怪我はないそうですよ。良かったですね、アキ君」

そう言うてにこやかに笑う姉さん。

腕がなくなつてショックじゃないといえば嘘になる。でも、僕以外皆無事だったという嬉しさの方が大きい。

「そつなんだ。それは良かった」

あれ？　そういえばなんかこの場に違和感があるような……って

「ね、姉さん！？　なんでここにいるのさ！？」

今は外国にいるはずなのに。何で姉さんがこの場にいるんだろう？

「それは……弟が事故にあって心配しない家族なんているはずがないでしょう？」

そっか。心配してきてくれたのか。

それは良いんだけど……

「じゃあ……なんで母さんと父さんはいないのかなあ？」

心配しない親はいないんじゃないのか。

「ああ。それは、もちろん来たがっていたんですが……『私が面倒を見るから心配しないで仕事に専念してください』と姉さんが言うてきたからです」

「あはは。何だ、そうだったんだ」って、

「ええええええええええ！？　ね、ねね姉さんまさか僕と一緒に暮らすつもり！？」

「何を言っんですか。当たり前でしょう？　その体じゃ色々大変そうですし」

「アーキ？　そんな言い方お姉さんに失礼なんじゃない？」

「そうですよ明久君。お姉さんはきつと心配してくれてるんですよ？」

「……………うらやましい。同棲生活（ボタボタボタ）」

ムツツリー二は一体何を想像したんだろうか。それに、姉弟と一緒に暮らすのは同棲生活とはいわないと思うんだけど。

うーん、確かに普通なら心配してくれる姉に感謝して、喜んでお願いするだろう。『普通なら』。でも、姉さんは……………。

「そんなに嫌がらないで下さい。あんまり嫌がると、姉さん寂しくて……………アキ君にチュウをしたくなってしまうす」

ほらこれだ。僕に女装させたり、チュウを迫ったり。本当は姉さん僕の事が嫌いなんじゃないかと思う。

だって、普通弟の事を思っているならそんな変な事しないはずだし。

「チュ……………チュウって／＼／」

「大胆ですっ！」

「接吻とは……………！」

3人ともそこに反応するのか。さすがは女の子。でも、反応するべきところはそこじゃないんだ。

「……………明久。今回ばかりは同情するぞ……………」

「雄……………」

優しい言葉をなげかけてくれる雄二。こんな優しい雄二なんて…
…初めて見た。そして雄二から出るオーラというかなんと言つか。
何か深い事情があるように思わせる。

「む、もうそろそろいい時間じゃな。ワシらは帰るぞい」

「では、明久君。また明日来ます」

「アキ。お姉さんには優しくね？」

「……………（グッ）」

「じゃあな明久」

「ではアキ君、姉さんは着替えを持ってきますね？」

こうして、6人とも部屋をでていった。

…………… ムツツリー二の《グッ》にはいったいどんな意味が含ま
れているんだろう？

第一問 僕と事実と仲間達（後書き）

ご意見、ご感想、アドバイスなど、心よりお待ちしております。

第二問 僕と気持ちとある親子（前書き）

この回はだいぶ編集しました。

……あと、前家のほうを消しました。

第二問 僕と気持ちとある親子

「誰もいないとちよつと寂しいな……」

不意に、右腕のあつた場所へと目をやってしまう。

これからどうなるんだろ……。一応利き手はちゃんと残ってるから何かを書いたりとか掴んだりとかの 基本動作は問題ないんだろ
うけど、ほとんどは利き手とは反対の手で物を支えたり抑えたりしてるんだから、そういう動きは難しくなるかもしれない。ゲームだつて左手だけじゃ難しいし、泳いだり走ったり跳んだり飛び降りたりが上手く出来なきゃ、鉄人から逃げられないじゃないか。

それに何より、みんな気を遣つて遠慮とかするようになって、僕からどんどん離れて行つちやったりしたらどうしよう。

ああ、なんか一人になったとたん急にネガティブな考えばかり浮かんできた。シヨックより皆が無事だった方の嬉しさの方が大きいのは嘘じゃない。

だけど、シヨックが小さいわけでもないんだ。

一人暮らしで「一人」というものには慣れていたはずなのに……。『一人』と『孤独』って、似てるようで違うんだな。一人は寂しくないけど、孤独はとても寂しいものだ。

カツツ カツツ

あ、誰か来たみたいだ。姉さんかな？

なんだか落ち着かなくなつて、急いでベッドに潜り込む。すると、

ガラツ

「吉井さん、検温です」

なんだ、看護婦さんだったのか。
人が来ているのに寝っぱなしだと失礼だから、再びベッドから体を起こす。

「……あれ？　そういえば、怪我でも検温ってやるんですか？」

病気とかだったら検温も納得できるけど、怪我でも検温するものかな？

「はい、術後ですので」

ああ、なるほど。納得。

「あ、そうなんですか。分かりました」

デジタル体温計を左手で受け取り、そのまま流れ動作で右脇ではさ……めない。

「困ったなあ……」

仕方ないので、やりにくいけど左脇にはさむ。

しばらくすると、pipipi! と無機質な電子音が鳴った。

「かしてもらえますか？」

「あ、はい」

看護婦さんは、「37.2 ですね……」と用紙に書き込み、

「んー……少し微熱気味ですね？ 具合はどうですか？」

心配そうな顔で聞いてきた。

うーん。少し熱っぽい気もするけど……。でもまあこのぐらいなら、

「だいじょうぶです」

だと思っ。

「そうですか。術後で免疫力と体力が落ちていますから、少しでも体がだるかったりしたら言って下さいね？ 一応熱さましを出しておきますので、食後に飲んでください。では、お大事になさってくださいね」

看護婦さんは、外へ出て行っ。

うーん、熱があっ。……。熱があるとなんかネガティブになりやすいつて聞いたことがあるような期がする。このもやもやしたような不安というかそういう気持ちっ、もしかしてそこから来ているのかな？

うん、きつとそうだ。わかったら、少し安心した。きつと熱が引いてみんなが来る頃には、きつとこんな気持ちも無くなっているだろう。……みんなが来てくれれば、ね。

——って、危ない危ない。また気持ち落ち込みそうになった。こっという時っ、早く寝ちゃうのが正解なんだろうか？

考えるのも面倒くさくなっ。来た。早く寝ちやおう。

……と。

コンコン

やや控えめに、ドアをノックする音が鳴り響く。ドアをノックするなんて姉さんじゃありえないし、みんなはもう帰ったし、看護師さんも今出て行ったばかりだ。今度は一体誰だろう？

コンコン

「あ、はい。どうぞ」

「失礼します」

中に入ってきたのは大人の女性。知らない人だけど……。

「すみません。吉井明久さん、ですよね」

「え？　そうですけど……」

「よかった。ちょっと会って欲しい子がいるんですけど、いいですか？」

何で僕の名前を知っているんだろう？　もしかして、僕が覚えていないだけでどこか出会っていたりするんだろうか？　僕に会わせたい人がいるって言うけど……？

「あ、それは良いんですけど……、失礼ですが貴方は……？」

「ああっ！！　すみません、申し遅れました！！　私は――」

なんだかこの人、雰囲気は姫路さんに似てるなあ。

なんて事を考えていると、唐突に一人の男の子が入ってきた。この女性の子供なんだろうか？　なんかこの子の顔は見たことがあるけど——って、

「ああああっ！！　あの時の——っ、痛……ッ」

うう……、大声を出すやと体に響くってよくドラマとかで見るけど、あれって本当なんだね……。

それにしても、この子ってよく見たらあの時僕が助けた子だ。

お母さん（？）は痛みに一瞬顔をしかめてしまった僕に『大丈夫ですか？』と声を掛けながらも、その子に向かってなにやら手でジエスチャーのようなものをしている。

もしかしてこの子——

「もしかしてその子、耳が聞こえないんですか？」

「えっ？　……あ、はい、実はそうなんです。この子、生まれつき耳が聞こえなくて……」

「そうなんですか……。でもそしたら何で僕のが分かったんですか？　声が聞こえれば「明久」という名前が聞こえたかもしれないですけど……」

「この子、耳は聞こえないんですけど代わりに記憶力がとてもいいんです。貴方の名前……と言っても漢字がまだ分からないのでその『吉井』と言う形ですけど、事故があつた場所を覚えてくれたんです。そこで、誰が事故に会ってしまったのかを聞いて回ったら、貴方と言う事が分かったんです」

「なるほど……」

記憶力が良ければ何処で事故にあったのかとか僕の名前の感じがどんな形をしていたのかまで分かるんだ……。きっと将来頭のいい子に育つだろう。

「本当に本当にありがとうございました。貴方がこの子を助けてくれなければきつとこの子は今頃……」

深々とお辞儀をする親子。なんだかちよつと嬉しくなる。

「それで、『この子が聞いて欲しい物があるんだ!!』って聞かなくて……。いっぱい練習したので、聞いてやつてもらえませんか?」

「もちろんです。でも一体何を――」

僕が了承した事にほつとしたのか、その先の言葉を聞かずお母さんは子供に手話をする。こういうとこ本当に姫路さんっぽいな。

と。突然男の子が口を開いた。

「お……にい……ちゃ。あ、いあ、と……お。お、にい、ちゃ。あ、い……り……と」

男の子は一生懸命言葉をつむぐ。耳が聞こえない人は言葉を発するのに、相当苦労するというのを聞いた事がある。と言う事は、この子は僕にお礼を言うために相当練習したんだろう。

「まだ全然練習が足りないですけど、この子なりに頑張つ――? あの……」

「お、に……いちゃ……?」

気づけば、自然と涙がこぼれていた。

「……あ、すみません。泣いちゃうなんて、みつともないですよ」

迷っていた。あの時僕が動かなくても、もしかしたらあの子は自分でよけたんじゃないか。そうだったら自分のやった事は無駄だったんじゃないかと。僕はそんな無駄な事の為にこの先人生が潰れかねない状況に陥ってしまったんじゃないかと。

……でも、そんなものは僕が勝手に考えていたただの妄想だった。こうして、お礼を言うってくれる助けた子のお母さんがる。助けた子がいる。

僕がやった事は、決して無駄な事なんかじゃなかった。

本当に……本当に、あの時行動してよかった。

第二問 僕と気持ちとある親子（後書き）

ご意見、ご感想、アドバイスなど。心よりお待ちしております。

第三問 バカとババアとネックレス（前書き）

進化……してるのかな？

なんて思うこともしばしばです《汗》

第三問 バカとババアとネックレス

あれから一ヶ月。

まだ完治した訳ではなく、包帯が取れてないところもあるけど…
…先週、ようやく退院する事が出来た。

一週間の自宅療養も終えて、一ヶ月ぶりの学校。学校は久しぶりだけど、いつものメンバーは毎日病院に来てくれたので、久しぶりじゃなかったりする。

いつものように気を遣わないで接してくれてるから何でかって聞いたら、

「信頼できる本当の仲間に気を遣うなんて事は出来ない」

と即答された。あの時はすごく、ホントにうれしかったな。照れ隠しに雄二の頭をヘッドロックしたら倍返しされたけど。

いい友達を持つ事が出来てよかった。

門の前。新入生の、不安と期待がない交ぜになったような気持ちで中に入ると、

「おい吉井、ちょっと校長室まで来い」

どうやら不安が打ち勝ってしまったようだ。

「ちょっと……鉄人！ 人がせつかく久しぶりに気持ちよく登校して来ているのにいきなり呼び出しとは失礼じゃないですか！？ 僕なんか悪い事しました！？」

「失礼なのはお前の方だ。鉄人と呼ぶなと何回言ったら分かるんだ？それに、悪いことなんぞ貴様を30回補修室送りにしても足りないほどしているだろうが。まあ、今回の呼び出しは説教じゃなくて話の方だ」

30回補修室送り。それは分かりやすく明快に言っと、『死』だ。

「先生？今さらつと僕の事を貴様呼ばわりしましたよね！？」

「そんなことより早く来い」

「スルーされたっ！？そんな事じゃないし！！ちよっ！首根っこを掴まないで！いやだ！いやあああああ！！！！！」

僕の悲鳴が朝一番の校庭に響き渡った。
ちよっと傷に響いたのが、悲しかった。

「うう。先生、なんてひどい事をするんですか」

「お前がとつと来ないからだ」

とつと来ないも何も、鉄人がいきなり僕の首根っこを掴んだんじゃないか！

と、幾ら叫んだって心の叫びがこの分厚い鉄鋼で情報手段と言う

名の常識をはじく鉄人とどくわけが無いので、

「で、僕に何の用ですか？ 学園長」

僕を呼び出した当の本人に聞いてみる。

「お前さんの腕についてだよ。なんでも事故に遭って腕を切断したとか。全く、気の毒だったねえ」

ちよつとこのババア殴ってもいいですか？

……あ、これでも一応学園長なんだし、殴ったら即退学か。

「それで召喚獣なんだがね、ちよつと召喚してみてくれないかい？」

そついうとババアはフィールドを広げた。

「それが僕の右腕と何の関係があるのか全く分かりませんが……
分かりました。試獣^{サモン}召喚ッ！！」

試獣^{サモン}召喚という声とともに足元に幾何学的な魔方陣が現れた。そして、

ポンッ

という軽い音と共に出てくる僕の、

隻腕の召喚獣。

「はぁあッ！？ 何で僕の召喚獣も隻腕になってるんですか!？」

「……吉井。あんたと召喚獣は『フィードバック』というカタチでリンクしてるんだ。いつもはアンタへのフィードバックしかプログラムしてないんだけど、今回はなぜだか知らないが『召喚獣へのフィードバック』というカタチでリンクしてしまっただよ」

何を言われてるかさっぱり分からない。

「分からないって顔だね……。まあ、とにかく言いたかった事は、『召喚獣が片腕じゃ戦いにくいから特別に能力をつけてやるう』って話なんだよ。わかるかい？」

今度はわかったぞ。

「召喚獣の腕は調整で直せないんですか？」

横にいる鉄人が聞く。

「それが成功してればここに吉井を呼ばないさね……。やってはみたけど、プログラムがビクともしないんだよ……」

「えーっと……なんでそんなことになっちゃったのか心当たりとかないんですか？」

「ああ……そういえば今朝プログラム用のコンピューターにちよこっただけコーヒーをぶちまけたような気がする」

「いや、絶対それだろ原因！！」

ここの学園長って、案外バカだったりするんじゃないんだろうか？

「……こほん。それで、僕の召喚獣には何の腕輪をつけてくれるんですか？」

この場を仕切りなおすために、話題を切り替える。今の僕は最高のMCさっ！！MCって、なんだっけ……？

「腕輪じゃないんだよ。これを、おまえ自身につけてもらうのさ。アンタの点数じゃとてもじゃないけど……いや、とてもか。召喚獣用の腕輪なんて使えないからね」

そういつて取り出したのは、ネックレス。金の剣と、銀の砂時計のアクセサリーがついている。

どうでも良くないけど、なんだか殺意が沸いてきた。

「これがなんの能力になるんですか？ 見た目はただのネックレスみたいですけど……」

「こっちの剣が装備を強くする能力さね。点数が低くなるかわらなけりや意味が無いけど。点数を大きく変化する前と比べる。たとえば点数補充後と補充前とかとね。点数の差がいい方に大きければ大きいほど強い装備になる。で、こっちの砂時計が3分だけ点数を倍にするのさ。3分たった後は元の点数の半分になるんだけどね。この二つは使い方次第でかなり役に立つ」

いきなり言われたから何がなんだかよく分かんないけど、なんかすごそうだ。3分ってラーメン並だけだ。

三分もあれば何体か召喚獣を戦死させる事も可能だし、これはかなり使えるかも。

「ところで、どうしたら能力が使えるんですか？」

「ああ、まだそれは使えないんだ」

「？　なんでですか？」

嫌な予感……。

「だってまだ、調整中だからね」

「まだ使えないものを渡さないで下さいよおおお！」

イヤナヨカン、的中

完成してないものを相手に渡すなんて、非常識なんじゃない？

どうやら学園長はバカなだけでなく、常識も持ち合わせていないようだ。

「まあまあ。お前さんに能力の合言葉キーワードを決めさせてやるために完成させてないんだよ」

そうだったのか。ま、ババアにしてはいい事してくれるじゃないか。きつとババアのネーミングセンスなんてたかがしれてるだろうし。

「なんだか知らないが急に今殺意が沸いてきたよ」

それは僕も同じです、ババア学園長。

「そうなんですか。うーん。なんにしようかな……。……決まらないんで今度でいいですか？」

「ああいいよ。それまで待ってやろっじゃないか」

やっぱり言い方はムカツク。

「じゃあそっいうことで。失礼します」

「……………学園長。上手く丸め込みましたね。まだ調整が終わっていないなんて言えないですし……………」

「まあね。それにしてもバカは扱いやすいもんだね。こっぴつとこっぴつだけバカな奴はいいと思うよ。

頭のいい奴にこんなこと言っても信じてもらえないからね」

「「ヤッパリ吉井って……………」」

「へくしっ!」

うう……風邪でも引いたかな？
それともどこかで僕の噂でもし
てるんだろっか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1266y/>

バカとテストと隻腕の観察処分者《改》

2011年11月4日11時17分発行